

# 巻頭言

グローバルリーダーシップ研究所  
比較日本学教育研究部門長

古瀬 奈津子

本部門では、2018年度に第20回国際日本学シンポジウムおよび第13回国際日本学コンソーシアムを開催しました。2018年7月7日（土）・8日（日）には、「変革と継承の明治文化—地域/都市からみた文化形成—」を統一テーマとして、国際日本学シンポジウムを行いました。2018年は「明治150年」に当たっており、内閣官房に関連施策推進室が設置され、関連施策が推進されたところです。本シンポジウムもその一環として行われました。1日目のセッションⅠでは「地域からみた文化形成」をテーマとして、まず、マーガレット・メール先生（コペンハーゲン大学）の「ローカル・ナショナル・グローバルの相互関係—四竈兄弟と仙台地域の音楽文化を中心に—」という基調講演があり、津軽地方や鹿児島における士族や華族による文化受容の研究発表が行われました。2日目のセッションⅡは「都市からみた文化形成」で、鈴木淳先生（東京大学）の「煙突と電柱の立ち並ぶ街—明治期東京の技術と生活—」の基調講演の後、都市問題や都市祭礼、商店街の成立といった近代らしい興味深い諸問題に関する発表が行われました。メール先生は『歴史と国家：19世紀日本のナショナル・アイデンティティ』（東京大学出版会、2017年）というご著書の訳本が刊行され、注目を集めている海外の日本研究者であり、お話を伺うことができる貴重な機会となりました。シンポジウムの担当者は本学の難波知子先生と湯川文彦先生でお二人に相応しい清新なシンポジウムになったと思います。

一方、2018年12月10日（月）・11日（火）には、国際日本学コンソーシアムが、「いのち・自然・社会」を統一テーマとして開催されました。一昨年度から新たな形式で設定されるようになった統一テーマは、現代社会が直面する諸問題の一端を表すものとなり、各部会で興味深い発表が行われました。今回は、従来の参加校以外に、ニューサウスウェールズ大学（オーストラリア）や釜山大学校（韓国）といった協定校からも参加していただきました。今回は参加人数が適正化し、部会の重複も解決して、発表や質疑を十分に行うことができました。ただし、全体会のあり方や部会の再編など、今後の課題も残されています。

本部門は学内改組により、昨年度からグローバルリーダーシップ研究所の一部門となりました。しかし、日本学は本学の中期目標・中期計画にも記されている重点分野であり、グローバルリーダーシップ研究所が展開している国立大学機能強化分による事業の一環を従来どおり占めております。国際日本学シンポジウムと国際日本学コンソーシアムを継続することが本部門に課せられた任務であることは確かです。近年本学でも定年による教員の交代が多くなっておりませんが、今後も本部門の仕事が停滞することなく引き継がれていくことを願ってやみません。皆さまからのご支援を心よりお願い申し上げます。

2019年3月

